



令和元年 10月28日
佛教大学附属幼稚園

褒めて育てる一善哉ぜんざい

園長 田中典彦

実りの秋を迎えました。花を咲かせ、一生懸命に蓄えてきたものが果実となって表されたものなので、このころの園では、あちらこちらで運動会の練習風景が見られます。年々すこしずつ主ぬしが変わっているのですが同じような様子が目に留まります。先生の「できた、できた、上手だよ」の褒め言葉がうれしくて、今までやれなかったことにどんどん挑戦してゆくのです。

褒めて育てる第一人者だったのがゴータマ・ブツダ（釈尊）だったようです。弟子たちに質問を発し、弟子たちが期待にかなった答えをした時や教えの通りに実行できた時に「善（よ）い哉（かな）、善い哉」満足し称賛を与えたのです。ですから、仏教の経典にはよく見かける言葉です。「善哉善哉」は音読みでは、「ゼンザイ、ゼンザイ」となり、「いやあ！けっこう、けっこう！まさにそれでいいのです」という程の意味になります。さて、この善哉と漢字訳された言葉は、サンスクリット語の Sadhu（サードウ）であって、「よい」とか「素晴らしい」を意味しています。

インドでは、今日でも一般に使われていて、たとえば、音楽会などで上手な演奏や歌を聞いた時には、私たちは拍手をして褒めたたえるのですが、「サードウ！サードウ！」と聴衆が声をそろえて称賛します。また学会などの発表会などでも、論者に賛意を表す時にもこの言葉が用いられています。

善哉といえ、今では小豆とモチや団子を甘く煮込んだ食べ物のことですが、一体どうしてあのような食べ物の名前になっていったのでしょうか。明確な答えはないのですが、次のようないわれがあります。

その昔、京都から一人の高僧が薩摩（鹿児島県）を訪れることとなりました。立派な僧侶を迎えることとなった人々が、どのようにもてなしたのかと思案しました。そこで思いついたのは、この地の特産品である砂糖だったのです。砂糖は高価なもので京都あたりでは簡単に手に入らなかったそうです。そこで砂糖をたっぷりを使い、しかもおモチの入った食べ物を作って、もてなしをすることにしました。それは当地の人たちも作ったことのないもので、呼び名もないものでした。たまたまそれをもてなされた僧は、「いやあ！けっこう、けっこう！素晴らしい」と褒めたたえるところを「善哉善哉」と言ったことから、「この食べ物は善哉というのだと名前がつけられ、そう呼ばれるようになったということです。

運動会が過ぎれば、次はかいが展です。身体を作ること、自分の思っていることを言葉や行動で表すこと、そして仲間と一緒に考えアイデアをたてること、どれもこれもこの世界に生きていくための基本であると思います。

草木が実を実らせることによって、自らの価値を表し出してくるように、子供さんたちも一生懸命頑張ってきたことを保護者や保育者の前に、「こんなことができるようになったよ」「僕はこう思うんだ」「こうした方がいいよ」などと表現しようとするのです。そのような時には大いに褒めてあげていただきたいと思います。「くさすより褒める」これが育てる道だとののさまが教えてくれているように思います。ぜひ実践してみてください。